

중앙대학교
국제학술심포지엄

한·중·일 3국의
이문화커뮤니케이션에 관한
보편성과 특수성

The Universal and Distinctive Traits in Cross-Cultural
Communicative Patterns of Three East Asian Countries;
Korea, China and Japan

2011

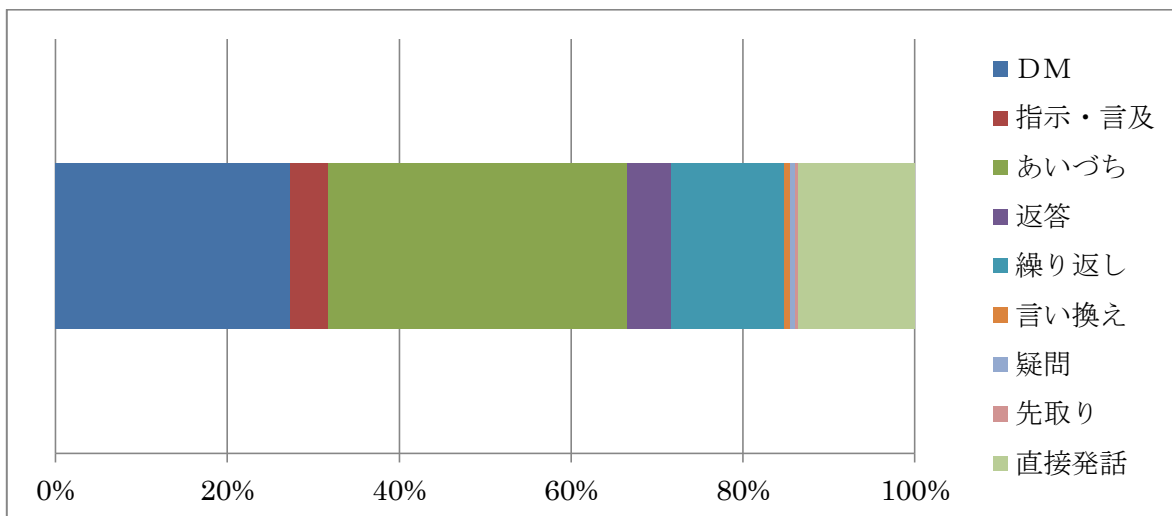
日本語の会話におけるあいづち・ディスコースマーカークの 語用論的特徴と会話教育への示唆

首都大学東京 国際センター
磯野英治 (이소노 히데하루)

1. はじめに

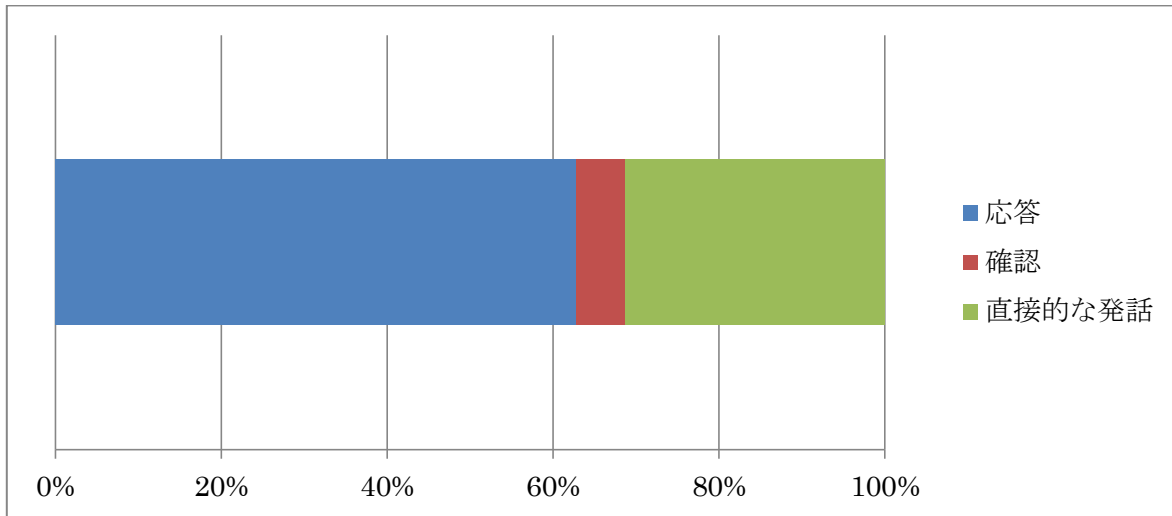
日本語を外国語として学ぶ日本語学習者は、初級から中級にかけて語彙の基本的な意味と文法体系の基礎を習得し、それらをベースとしてコミュニケーションの実践を試みる。しかし日常的に話されている日本語の会話は、その字義的・基本的な意味のみで運用されている訳ではなく、このような言語の語用論的な側面は、日本語に限ったことではない。特に会話というものが二者間以上の話者から構成され相対的效果が生じ、このような特徴が顕著に現れるため、研究者の関心を惹き、これまでもターンテイキング (Schegloff & Sacks 1973, 西原 1991, 松本 2005, 大浜 2006) や、あいづち (水谷 1984,1988,1993, 堀口 1997) などが実際の言語運用の観点から研究されてきた。一方、ターンテイキングでは「タイミングと規則」、あいづちでは「役割や機能」が実際の会話データをもとに研究されてきたものの、事例研究や会話データの条件統制がされていない研究が多いことも否めない。また会話相手への相対的效果という観点からは、話者が交替するターン交替時に焦点をあてた分析が必要になると考えられるものの、そういった観点からの先行研究は数少ない。このような現状から磯野 (2009,2010b,f) では、日本語教育への応用を視野に、日本語母語話者間の会話においてターン交替時にどのようなやりとりが行われているのか、またその特徴は何かという点に着目し、ターン交替時の話者の発話を表現の形式的分類、及び会話相手への相対的效果としての機能的分類という二つのレベルに分けて、定量的分析を行った。

グラフ 1：日本人母語話者 24 人の談話における構成要素 (形式上位分類)



(磯野 2010b)

グラフ 2：日本人母語話者 24 人の談話における構成要素（機能上位分類）



磯野 (2009,2010f)

上記調査は、日本人母語話者男女各 12 名の会話におけるターン交替時に現れる諸特徴についてグラフ化したものであり、表現形式（形式的分類）ではあいづち、及びディスコースマーカ―がその大半を占めていることがわかった¹⁾。しかし既述のようにこのようなひとつの表現形式は、会話相手への相対的効果といった観点から機能に分類した場合、一対一の関係にはならず、むしろひとつの表現形式が有する機能には数多くのバリエーションがあることが確認されている（会話文参照）。

形式的分類：C. あいづち c-2. そう系

機能的分類：A. 応答 a-1. 聞いているという信号

IN	じゃあですねー、お休みの日があったら何をすることが多いですか？。
M04	<u>そうですね</u> 、最近はよく麻雀やってますね<笑い>。

形式的分類：C. あいづち c-2. そう系

機能的分類：A. 応答 a-3. 同意の信号

IN	普段から、よく話とかしたりする？。
M04	<u>そうですね</u> 、やっぱりまた部活の人に<笑い>(はい)、部活の子に (はい)、タイの方がいらっしゃいまして。

磯野 (2010b)

¹⁾ 磯野 (2009,2010b,f) 及び本研究で分析対象となっているのは「IN (インタビュアー)」から被験者である「話者 M04」へターンが受け継がれた直後の発話である。会話データの質や分類方法については「2. 研究概要」を参照のこと。

このため本研究では、日本語母語話者間の会話において、ターン交替時の発話に着目し、ひとつの表現形式がどのような語用論的特徴とバリエーションを有するのかを、形式的分類と機能的分類の対応関係から明らかにしていく。そして今回はその中でも特に日本語母語話者の会話で高い割合をもって使用されている表現形式であるあいづち、及びディスコースマーカーに注目し、まず形式的分類と機能的の対応関係について定量的な数値を算出しその分布を把握するとともに、特徴的な会話について個別に会話例をあげ定性的に分析していく。

2. 研究概要

2.1. 会話データ

本研究で扱う会話データ²⁾は磯野 (2009,2010b,f) と同様で、日本語母語場面における日本人インタビュアーは同一の人物とし、もう一人の被験者については日本人(男女各12名)の計24会話とした。それぞれの各ペアは全て初対面、年齢については20代、現在の言語環境は東京で共通語圏という環境条件で統制を行った。なお録画したデータは、ターン交替時の発話を分析するため「改訂版: 基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)2007年3月31日改訂版」(宇佐美 2007)を採用し、会話開始から終了までの全ての会話を分析対象とした³⁾。

表1：被験者の属性

グループ	年代	現在の言語環境	会話協力者の属性	会話総数
日本語母語場面	インタビュアー：30代 学生：20代	東京 (共通語)	インタビュアー：1名 (女性) × 日本語母語話者：男女各12名	24会話

²⁾ 本研究で扱った会話データは現在「mic-J corpus 日本人へのインタビュー」として首都大学東京大学院 日本語教育学教室で公開されている。「mic-J corpus」の公開については西郡・崔・磯野 (2010) を参考のこと。

(http://japanese.human.metro-u.ac.jp/mic-j/mic-J_corpus_JI/index.html)

³⁾ 文字化については会話データの音声的特徴やターン交替の認定の観点から、文字化を3次文字化(ピアチェック)まで行った。また本研究で取り扱ったデータは「リハーサル」という設定で、ある程度リラックスした状態で行った録画について事後に被験者から同意を得たものである。フォローアップアンケートでは5段階評価法で「1. 会話の自然さ (3.25)」「2. 言いたいことを話すことができたか (3.96)」「3. 録画を意識しなかったか (3.79)」という数値を得た。本研究では創作されたシナリオのある会話とは違って、あるいは会話参加者の言語行動自体は統制されていないという意味で会話データを「準自然な会話」と位置づける。このような会話の位置づけに関しては土岐 (2005)、宇佐美 (2007) を参照のこと。

2.2. あいづち・ディスコースマーカークの分類

これまでの磯野 (2009,2010b,f) の分類⁴⁾ では、まず表現形式として形式的分類を行い、その相対的効果を機能的分類によって検証してきた。本研究においても同様の方法を採用するため、形式的分類では全体の中からあいづち、及びディスコースマーカークのみを扱い、機能的分類へ対応させていくかたちになる。本研究における分類項目を以下に示す。

表 2 : 形式的分類

A. あいづち	a-1. はい系	a-2. そう系	a-3. 感動詞系	a-4. その他
B ディスコースマーカーク	b-1. 接続	b-2. つなぎ言葉	b-3. フィラー	

表 3 : 機能的分類⁵⁾

A. 応答	a-1. 聞いているという信号 a-2. 理解しているという信号 a-3. 同意の信号 a-4. 否定の信号 a-5. 感情の表出
B. 確認	b-1. 反復要求 b-2. 聞き取り確認要求 b-3. 理解確認要求 b-4. 説明要求 b-5. 相手への聞き取りチェック b-6. 相手への理解チェック
C. 直接的な発話	ターンが受け継がれた際に、相対的にみてクッション言葉や会話相手に対する合図や意図がなく、会話が始まる発話で、かつ上記の A、B を含まないもの。

⁴⁾ 形式的分類、及び機能的分類についてはコーディングの信頼性を確保するため、2名の評定者が24会話全データの25%(男性3会話、女性3会話)について個別に認定を行うCohen's Kappa (Bakeman&Gottman 1986)を採用し形式的分類(k=0.910)、機能的分類(k=0.823)ともにk>0.75の数値となった。本研究ではその目的に応じて、対象の形式的分類項目のみを提示している。形式的分類の分類項目全体については、磯野(2010b)を参照のこと。

⁵⁾ 「A. 応答」は情報要求(質問・同意要求)や行為要求(単独行為要求・共同行為要求)や注目要求のような話し手からの働きかけに対して、聞き手が応じる発話、「B. 確認」は「A. 応答」のような話し手からの働きかけに対して、聞き手が同じように働きかけを返す発話で対話者との間で何らかの意味交渉が行われている発話、「C. 直接的な発話」は、相対的にみてクッション言葉や会話相手に対する合図や意図がなく会話が始まる、会話相手からの働きかけを必ずしも必要としないA、Bを含まないもの。

3. 分析結果と考察

3.1. 形式的分類と機能的分類の対応関係における定量的分析

あいづち、及びディスコースマーカ―について、形式的分類と機能的分類を対応させ、定量的処理を行った結果、形式的・機能的分類における上位分類では、以下のような分布となった。

表 4：形式的分類と機能的分類の対応関係における出現頻度（回）

	A. 応答	B. 確認	C. 直接的な発話	合計
A. あいづち	704	0	25	729
B. ディスコースマーカ― (DM)	476	5	143	624

表 5：形式的分類と機能的分類の対応関係における出現率（%）

	A. 応答	B. 確認	C. 直接的な発話	合計
A. あいづち	96.57	0.00	3.43	100
B. ディスコースマーカ― (DM)	76.28	0.80	22.92	100

上記のように定量的分析で形式的分類と機能的分類の対応関係について算出し、その分布を概観すると、「A. あいづち」の主な機能は「A. 応答」であるが、あいづちの表現形式をとっていても「C. 直接的な発話」の機能を有している発話も少なからずある。「B. ディスコースマーカ―」の機能もやはり「A. 応答」がその大半を占めているものの、その他の機能にも広がりを見せている。全体的には「会話参加への積極性といった意味合いとともに、円滑な会話を進行させるための重要な役割を担っている」（磯野 2010f）と考えられる「A. 応答」の機能が、会話の中で大きな位置を占めていると考えることができるが、一つの表現形式が会話相手への相対的効果の観点から、様々な機能を有していることもこの分析結果からわかる。

3.2. 形式的分類と機能的分類の対応関係における定性的分析

「3.1. 定量的分析」の分析結果を踏まえ、各対応関係において典型的な例を提示し、その質的要素について分析・考察する⁶⁾。

(1) A. あいづち

(1-1)形式的分類：A. あいづち a-1. はい系

機能的分類：A. 応答 a-1. 聞いているという信号

IN	へー、ご実家はどこなんですか？。
M12	あ、宮崎なんですけど。
IN	おー。
M12	はい、ちょっと遠いんで、そこで、まあ、あんまり帰ってなかったんで(うーん)、久々に帰って取ってみようかなあと、<思いました><。>

M12はINの会話に対して、その会話内容や文脈とは関係ない応答から会話を始めている。

(1-2)形式的分類：A. あいづち a-1. はい系

機能的分類：A. 応答 a-2. 理解しているという信号

IN	あーいやいや、まあでもですねー、苦情が殺到しているのは雨漏りについてとか>{<, ,
IN	<物理>{>}的なこと<なんですけど>{>}, ,
M09	<はいはいはい>{>}, はいはいはい。
IN	あとーなんだっけ、食堂がー(あー)、いつも行列してたりとか>{<}。
M09	まあそれなら別の所に行けとか思っちゃうんですくけど>{<}。

M09はINの説明が終わらないうちに（会話のまとめりとしてINの説明が終わるのは4行目）先取りをするかたちで、その発話の内容を理解しているという意味で応答している。

(1-3)形式的分類：A. あいづち a-1. はい系

機能的分類：A. 応答 a-3. 同意の信号

IN	それは、じゃあ、頑張ってくださいとかいって<笑い>{<}。
M09	<はい>{>}, 頑張ります<笑い>。

M09はINの「頑張ってください」という応援に対して、共感を伴った同意を示している。

(1-4)形式的分類：A. あいづち a-1. はい系

機能的分類：A. 応答 a-4. 否定の信号

IN	えっとまず最初は、アルバイト、今何かやっていますか？。
M11	あ、今はやってないです。

M11はINの質問に対して、「いいえ」を使用せずその代わりとして「あ」という表現形式で否定の応答を示している。日本語の会話では特にYesやNoで答えるような会話相手の問いに対して、「いいえ」や「いや」は直接的な印象を与えると考えられ、その代用としてこのようなストラテジーが取られるのではないかと考えられる。

(1-5)形式的分類：A. あいづち a-1. はい系

機能的分類：A. 応答 a-5. 感情の表出

IN	じゃあですねー、あなたの学校の好きなところをひとつ挙げるとしたら、何でしょう？。
M05	/沈黙3秒/ん??、え??、こ、校舎がきれい。[笑うながら囁くように]

M05はINの問いに対して、沈黙し先作文脈との関連よりもむしろ聞き手に応じるようなかたちで発話を始めている。

6) 本研究では紙幅の関係で「A. あいづち a-1. はい系」と「B. ディスコースマーカ― b-3. フィラー」を定性的分析の対象とする。なお「a-1. はい系」は「ハ・ン・エ・ア」の音節を含む3音節以内の語、「b-3. フィラー」は「あの・えーと・えっと (一) ・あー・えー・んー・うーん」等のいわゆる言いよどみを含む語である。

(1-6)形式的分類：A. あいづち a-1. はい系

機能的分類：C. 直接的な発話

F05	なんか、デビュー作なんですよ、『蒼井優』っていう<女優さんの>{<}.
IN	<はいはいはい>{>}.
IN	<うーん>{>}
F05	“あ、なかなか、これは文学的だ”、っと思って。

F05 は自分自身の考えていたことを IN に再現するかたちで示しており、そのために F05 のターン交替時の「あ」は極めてモノログのようなかたちになっている。この F05 の発話は IN に向いている、或いは相対的な効果を担うものではないと考えることができるだろう。また形式的分類における下位分類「a-1. はい系」では、このような機能を有する発話はほとんど観察されなかった。

(2) B. ディスコースマーカ

(2-1)形式的分類：B. ディスコースマーカ b-3. フィラー

機能的分類：A. 応答 a-1. 聞いているという信号

IN	将来的には、じゃあ何か、こんな仕事に就きたいっていうのはあるんですか？。
M07	あー、そっか、そういうのも、将来、就きたい仕事も(うん)、いろいろ考えてたんですけど(ええ)、ちょっと<笑い>、4年生のこの段階で結構(ふふ)煮詰まっています。

M07 は IN の質問に直接答えているというよりも、質問内容や文脈とは関係なく IN にまず応答し、その間にその答えを言葉にしながらまとめている様子が窺える。

(2-2)形式的分類：B. ディスコースマーカ b-3. フィラー

機能的分類：A. 応答 a-2. 理解しているという信号

IN	どれぐらい行ってるんですか、それは。
IN	<えーっと>{>}、週に何回<とか>{<}. [→]
M12	<あー>{>}、週3位ですね、<大体>{<}.
IN	<ほー>{>}、そうですか。

M12 は IN が質問し、また言い換えたことによって、その発話内容を理解し、適切な受け答えをしている。もしも IN の2行目のような働きかけがなければ、なんらかの意味交渉が行われていた可能性も考えられる。

(2-3)形式的分類：B. ディスコースマーカ b-3. フィラー

機能的分類：A. 応答 a-3. 同意の信号

IN	行くとしたら、1人もいいかなーっていうか、今までもそんな行ってるわけじゃないけど、1人で行くのも、
M12	あー、<そうですね>{<}.
IN	<いいかなって>{>}感じですかね？。

M12 は IN の感想・意見に関してやや先取るかたちではあるが、共感を示している。

(2-4)形式的分類：B. ディスコースマーカー b-3. フィラー

機能的分類：A. 応答 a-4. 否定の信号

IN	じゃあ旅行に行くことはありますか？。
M12	あーないですね。

M12 は IN の質問に対して、「いいえ」を使用せずにフィラーで代用している。既述のあいづちと同様、「いいえ」や「いや」は直接的な印象を与えると考えられ、その代用としてこのようなストラテジーが取られたのではないかと考えられる。

(2-5)形式的分類：B. ディスコースマーカー b-3. フィラー

機能的分類：A. 応答 a-5. 感情の表出

IN	へー、何かその仕事で困ったり失敗してしまったこととかありますか？。
M01	あー、一回、撮ってる時にこうカメラを落として(うん、はい)、こう2台でいつも行ってるんですけど(ええ)、一台もう使えなくなって(えー)あと一台でってとかなったんでそれはすごい大変でしたね。

M01 は IN の質問に対して、自身の経験を回顧する意味合いで応答している様子が窺える。

(2-8)形式的分類：B. ディスコースマーカー b-3. フィラー

機能的分類：B. 確認 b-3. 理解確認要求

IN	じゃあですね、次の質問ですけども、あなたの学校の好きなところをひとつ挙げるとしたら、何ですか？。
M12	あー、この大学<ですか?><{>。
IN	<はい><{>。

M12 は IN の発話そのものは聞き取れているものの意味の理解の至ってはならず、IN の質問内容に関する自分の理解について、「あー」という発話からターンを取り意味交渉を行っている。このような場合は「意味理解の不十分」といった状況が声調にも表れる。

(2-9)形式的分類：B. ディスコースマーカー b-3. フィラー

機能的分類：B. 確認 b-4. 説明要求

F04	あ、シンガポールに行ってみたくいですねーなんか<{>。
IN	<へー><{>、どうして?。[→]
F04	あの、たー、多言語社会…、<で、そう><{>、
IN	<はい、はい><{>。[理解を示すように]

F04 は IN の端的で唐突な質問に対して、答えとしてその発話（答え）を行う理由や事情に関して戸惑いを感じ言いよどみ、その効果をもって IN にさらに詳しい説明（発話）を求めていると考えられる。

(2-10)形式的分類：B. ディスコースマーカ― b-3. フィラー

機能的分類：C. 直接的な発話

IN	ほー、それは何をしたいんですか？。
M08	いや、ただ単に行きたいだけで。
IN	うーん、ふふふ、分かりました。
M08	“あーこれでも(はい)都内なんだ”って思っ
IN	そうですよねー>{<。

M08は、INの「分かりました。」という完結した会話に続いて、INへ自身の体験を再現しており、やはり既述のあいづちのようにモノログのようなかたちになっている。

上記、定性的分析から概観できるように、ひとつの表現形式は様々な機能を有していることのみならず、形式的分類と機能的分類の対応関係においてもあいづち、及びディスコースマーカ―が会話相手への相対的効果の観点から、幅広い機能とともに使用されていることがわかった。特に興味深いのはあいづちやディスコースマーカ―が会話の進行を促すような肯定的意味や同意、共感を示すだけでなく理解や感情を表すこと、会話相手との意味交渉にも活用されていること、そして、必ずしも会話相手への働きかけとしてのみ機能している訳ではないこと、の三点である。

また、「形式的分類：B. ディスコースマーカ― b-3. フィラー 機能的分類：B. 確認 b-1. 反復要求」「形式的分類：B. ディスコースマーカ― b-3. フィラー 機能的分類：B. 確認 b-2. 聞き取り確認要求」「形式的分類：B. ディスコースマーカ― b-3. フィラー 機能的分類：B. 確認 b-5. 相手への聞き取りチェック」「形式的分類：B. ディスコースマーカ― b-3. フィラー 機能的分類：B. 確認 b-6. 相手への理解チェック」については、日本語母語話者の24会話という大量のデータからも、その対応関係が出現しなかった。これは、初対面会話といえども、母語話者間の会話においては比較的「B. 確認」のような意味交渉の行われる場合が少なく、かつその中で仮に何らかの意味交渉が生じたとしても本研究で分析対象となったあいづちやディスコースマーカ―といった表現形式は使用されることがあまりないことを示している。これは一方で、日本語母語話者と非母語話者の会話では、日本語母語話者間の会話よりも意味交渉が増えるという予測において、比較研究の観点から興味深い事象であろう。

4. 終わりに

日本語に関する研究では、文法能力の習得研究が中心である(任 1997)と指摘のあった頃と比較すると、現在は会話相手を想定した会話分析や語用論研究の成果により、運用能力の習得や関連する日本語母語話者・学習者の諸特徴を対象とした研究も見られるようになった。またインタラクションの観点から「面と向かって話すこと」への関心(ロング・磯野・塚原 2008)は、教育学に限ったものではなく、その広がりを見せている。しかし一定の観点からデータの条件統制を行い、定量・定性的に分析した先行研究は多いとは言えない。本研究ではこのような課題に応えるために、ターン交替時の発話に着目し、その表現形式と会話相手への相対的効

果を中心に分析を行った。

日本語学習者は少なからず、教材を活用して学習に励んでいる。そして、その教材はできるだけ、実際のやりとりが反映された内容が望ましいだろう。しかし、「現実を追体験する」といった意味合いからは、依然として実践的な内容が教材に十分盛り込まれているとは言い難い。本研究はコミュニケーションや相互作用を会話相手とのやりとりから捉え直し、実証的な研究から得られた成果を発展的に日本語教育に取り入れていくための基礎的研究として位置づけられる。今後の課題として、特に形式的分類の質的分析、及び研究成果の学習者への提示方法について、さらなる研究を行いたいと考えている。

参考文献：

磯野英治 (2009) 「日本語母語話者のターン交替における定量的分析とその語用論的特徴について－会話教育への示唆－」『2009 年度韓国日本学会傘下学会連合学術大会 Proceedings』、韓国 日本学会、122-126.

————— (2010b) 「日本語母語話者の会話におけるターン交替の特徴について－インタビュー会話における定量的分析から－」『日本研究』Vol.28、中央大学校日本研究所、137-158.

————— (2010f) 「日本語母語話者のターン交替における語用論的特徴について－機能的分類による定量的分析と会話教育への示唆－」『日本学報』第 84 集、韓国日本学会、227-240.

任栄哲 (1997) 「社会言語能力と日本語教育」『日本研究』Vol.12、中央大学校日本研究所、15-29.

宇佐美まゆみ (2007) 『魅力ある大学院教育イニシアティブ「多言語社会に貢献する言語教育研究者養成プログラム」報告集3 自然会話教材開発研究』、東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学プログラム推進室.

————— (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度 科学研究費補助金 基盤研究B(2) (研究代表者 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書、17-36.

大浜るい子 (2006) 『日本語会話におけるターン交替とあいづちに関する研究』、溪水社

土岐哲 (2005) 「インタビュー・聞き書きと質問紙調査法」『日本語学』6月臨時増刊号vol.23、32-43.

西郡仁朗・崔文姫・磯野英治 (2010c) 「mic-Jコーパスの公開について－「外国人へのインタビュー篇」「日本人へのインタビュー篇」－」『人文学報』377号、首都大学東京都市教養学部人文・社会系、31-39.

西原鈴子 (1991) 「会話の turn-taking における日常的推論」『日本語学』10月号 vol.10、10-18.

堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』、くろしお出版.

松本剛次 (2005) 「日本語学習者のターンの受け継ぎに関する談話レベルでの横断調査－フランス語母語話者でのケーススタディー」『言語社会心理学的アプローチによる自然会話分析方法論ハンドブック』、東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、CD-ROM 版、135-150.

- 水谷信子(1984) 「日本語教育と話し言葉の実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古希記念論文集』 第二巻 言語学編 三省堂.
- (1988) 「あいづち論」『日本語学』 Vol.7 No.13、4-11.
- (1993) 「「共話」から「対話」へ」『日本語学』 Vol.12 No.4、4-10.
- ロング・ダニエル・磯野英治・塚原佑紀 (2008a) 「小笠原諸島の欧米系島民に見られる語アクセントの型およびその世代差」『小笠原研究年報』 No.31、首都大学東京小笠原研究委員会、31-40.
- Bakeman,R.&Gottman,J.M (1986) Observing interaction : an introduction to sequential analysis. *Cambridge university Press*.
- Schegloff,E.A.& Sacks,H.(1973).Opening up closings. *Semiotica*, 7, 289-327.